

# 宮廷画家ゴヤは見た

2008(平成20)年8月18日鑑賞(GAGA 試写室)

★★★



監督・脚本=ミロス・フォアマン/主演=ハビエル・バルデム/ナタリー・ポートマン/ステラン・スカルスガルド/ランディ・クエイド/ミシェル・ロンズデル/ホセ・ルイス・ゴメス/マベル・リベラ (ゴー・シネマ配給/2006年アメリカ映画/114分)

……ナポレオンによるスペイン民衆弾圧と、ナチスドイツやソ連によるチェコスロバキア弾圧は、根が同じ……？ そんな気持ちを込めたミロス・フォアマン監督の骨太作品は、18世紀末の異端審問の矛盾を世に問うもの。『ノーカントリー』(07年)に続くハビエル・バルデムの怪演と、絶世の美女ナタリー・ポートマンの汚れ役挑戦にも注目！ そしてこの際、「マドリッド、1808年5月3日」(1814年)をはじめとするスペインの天才画家ゴヤの絵が物語る、あの時代の真実をじっくり勉強しよう。

## 第4章

### あの巨匠が、久しぶりに骨太の作品を！

私は全然知らなかったが、『カッコーの巣の上で』(75年)と『アマデウス』(84年)で2度、アカデミー賞監督賞を受賞したのがミロス・フォアマン監督。プレスシートによれば、ミロス・フォアマン監督は1932年旧チェコスロバキア生まれで、9歳の時に両親はゲシュタポに逮捕され、その後ナチの収容所で殺されたという過去をもち、プラハ大学映画学部卒業後、映画界に入ってきたという経歴の持ち主。そして、ソ連の戦車がプラハを侵攻した1968年8月、バリからプラハに短期間戻った後、『パパ／ずれてるウ！』(71年)を監督するためにニューヨークに移住したとのことだ。

そんな巨匠が、スペインの画家ゴヤとスペインの異端審問についての映画を作るというアイデアを思いついたのはチェコスロバキアの学生だった50年以上も前らしいが、そんな企画が今実現したのは一体なぜ……？

## 名作のリメイクが話題

## なるほどこれがゴヤの絵か！

「バロック三大画家」の1人といわれる17世紀のオランダの天才画家レンブラントを描いた『レンブラントの夜警』（07年）に続いて、スペイン生まれの画家ゴヤを勉強！ スペインの天才画家フランシスコ・デ・ゴヤ（ステラン・スカルスガルド）は国王カルロス4世（ランディ・クエイド）の宮廷画家に任命されていたから、アーティストとしては当時最高の地位にあった人物。私の乏しい絵画の知識で知っている、ゴヤの絵は「マドリード、1808年5月3日」の絵。つまり、スペインの市民たちがナポレオンの兵士たちによって銃殺されている絵だ。映画の冒頭、字幕とともにゴヤの絵が1枚、1枚、現れてくるが、そのどれもが日本でいえば、「末法」を描いたような暗い絵ばかり。それはなぜ？ 今まできちんとそういう勉強をしてなかったが、この映画によってあの時代のスペインの権力闘争と民衆の様子が明確に。なるほど、これがゴヤの絵だったのか！ それにしても宮廷画家という、本来なら権力ベッタリの立場にあるはずの画家が、なぜこんな暗い絵を……？

## 物語は2枚の肖像画から

時代は1792年。舞台はスペインのマドリード。つまり、1789年に起こったフランス革命の3年後だが、マドリードではまだその影響はみえないよう。しかし、スペインの国王カルロス4世は、フランスの国王ルイ16世の従弟だ。

今ゴヤが描いているのは2枚の肖像画。1枚は、友人である裕福な商人トマス・ビルバトゥア（ホセ・ルイス・ゴメス）の美しい娘イネス（ナタリー・ポートマン）の肖像画であり、もう1枚はロレンソ神父（ハビエル・バルデム）の肖像画。宮廷画家が国家（王宮）からどのように庇護されているのか、またいくらぐらい給料をもらっているのか知らないが、興味深いのは宮廷画家のゴヤであっても、トマスからもロレンソ神父からもお金をもらって描いていること。こうなると宮廷画家といえども商才が必要……？

ちなみに、ロレンソ神父から肖像画の中に手も描いてくれるのかと聞かれるとゴヤは「描くけど料金がアップする。片手なら〇〇円。両手なら△△円」ときたのにはびっくり。それはともかく、今ゴヤが描いているこの2枚の肖像画がこの映画のストーリーの骨格を作っていくことに。

## 主役はゴヤではなく、ロレンソ神父

この映画の原題は『GOYA'S GHOSTS』、そして邦題は『宮廷画家ゴヤは見た』だから、誰もが主人公はゴヤと思うはずだが、実はそうではなく、主人公はハビエル・バルデム扮するロレンソ神父。アカデミー賞助演男優賞を受賞した『ノーカントリー』（07年）での「怪演」は印象的だったが、この映画でもしっかりと自分の生き方を持っていると自任しているはずのロレンソ神父が、激動の時代の中で翻弄されていく痛々しい姿を存在感たっぷりに演じている。

ミロス・フォアマン監督はこの時代におけるスペインの異端審問のあり方と、自らスロバキアで体験した共産主義国家のあり方に共通点があることに目をつけてこの映画を監督したわけだから、その主人公にはロレンソ神父がピッタリ。したがってゴヤは、ロレンソ神父とイネスという2枚の肖像画に象徴されるあの時代、あの舞台に起きた権力闘争と愛の真実を語る「語り部」と位置づけられているわけだ。そういう意味では、原題もいいが邦題もピッタリ。

## あなたは異端審問に耐えられる？

「自白は証拠の王」。昔はそう信じられていたが、近代の憲法、刑法、刑事訴訟法が「何人も自白のみで有罪とされることはない」という原則を確立させたのは、過去の歴史から自白の恐ろしさを学んだため。ミロス・フォアマン監督がこの映画で皮肉たっぷりに描く異端審問による自白獲得のバカバカしさをみれば、それが本当によくわかる。イネスがユダヤ教徒だと疑われたのは、楽しく騒いでいた居酒屋で出されたゲタ肉を嫌がったため。その結果、異端審問所に呼び出されたイネスは厳しい拷問の末に、何と15年間も牢の中に閉じ込められることに。

他方、娘が異端審問所に呼び出されたきり戻って来ないことを心配した父親のトマスは、ロレンソ神父を通じて国王カルロス4世や異端審問所長（ミシェル・ロンズデー）への嘆願を願い出たが、それが無駄だとわかると、ある非常手段を……。

それは、拷問を受ければ人間は誰でも、つまりロレンソ神父だって「私はサルだ」という告白書にサインしてしまうという単純な事実を証明すること。

イネスもロレンソ神父もそんな異端審問に耐えられず自白したが、さてあなたはそんな異端審問に耐えられる？

## ナタリー・ポートマンの汚れ役にビックリ！

1981年生まれのナタリー・ポートマンは、1985年生まれのキーラ・ナイトレイと共に若手女優の中で私が現在最も美しいと思っている女性。ゴヤが描いている肖像画のモデルになっているイネスはまさにそれで、聖職者であるロレンソ神父ですら、その肖像画を見て心を動かされるほどの美貌。

そんなナタリー・ポートマンが、この映画では一瞬全裸でロープに吊るされる拷問シーンを見せてくれる他、何と異端審問所の牢の中に閉じ込められたボロボロの姿を惜しげもなく見せてくれる。とりわけ映画後半、ナポレオンの命令によってスペインの異端審問所が廃止され、15年ぶりにシャバに解放された後のイネスの姿は本当に汚れ役。絶世の美女が汚れ役に挑戦した映画としては、『Monster』(03年)におけるシャーリーズ・セロン(『シネマルーム6』238頁参照)と『チョコレート』(01年)におけるハル・ベリー(『シネマルーム2』43頁参照)が双肩だが、ナタリー・ポートマンもこの映画でその仲間入りを……。もっとも、この映画でナタリー・ポートマンは1人2役をしており、イネスが異端審問所の牢の中で産んだ一人娘アリシア役も演じている。そしてアリシアの方は、ナタリー・ポートマンの実年齢以上に若作りしているから、結局この2役でトントン……？

## ナポレオンの理想と現実とは？

1789年のフランス革命の合言葉は、自由、平等、博愛。そしてナポレオンが打ち倒したのは古い王政。したがって、これからは民衆を中心とした共和制国家ができるはず。フランスをはじめとする全ヨーロッパの民衆はそんな風に考えたし、ベートーヴェンもそう考えたことは、歴史上の事実。ところが、ゴヤが見たナポレオンの正体は……？ それで、「マドリッド、1808年5月3日」(1814年)の絵に端的に表現されている。また、ミロス・フォアマン監督は、スクリーン上でナポレオンによるスペイン民衆弾圧の様子を、あたかもナチスドイツやソ連がチェコスロバキアの民衆に対して行った弾圧と同じように生々しく描いていく。

## ナポレオンの功績は？ 今ロレンソは？

法制史的にみれば、ナポレオン法典をはじめとしてナポレオンが近代化のために果

たした役割はきわめて大きい。また中世秩序の中で動く宗教界を糾弾し、異端審問所の廃止を宣言したナポレオンの功績も大きい。他方、ナポレオンが実現したのは、フランスの統一だけではなく、イタリアやオーストリアそしてスペインと全ヨーロッパの征服だった。したがって、スペインのマドリードにナポレオン軍が入り込み、カルロス4世にかわってナポレオンの兄であるジョセフが国王に就いたのも当然。

しかし、ここでビックリしたのは、「私はサルである」と書いたロレンソ神父の告白書がトマスからカルロス4世の手に渡ったことによって、国外逃亡を余儀なくされていたロレンソ神父が、今度は何とナポレオンの大臣役としてマドリードに赴任してきたこと。今彼が語っている人権宣言を聞いていると、かつて聖職者であり、異端審問所の強化を主張していたロレンソ神父とはまるで別人のよう。かつての上司であった異端審問所長に対して死刑を求刑するロレンソの姿はカッコいいが、栄枯盛衰は世の常。さていつまでロレンソの天下は続くのやら……？

## イネスとゴヤの再会は？ イネスとロレンソの再会は？

異端審問所の廃止によって、長い間牢の中に閉じこめられていた異教徒たち(?)はすべて釈放された。15年ぶりに釈放されたイネスがフラフラと向かったのは、懐かしいわが家だったが、フランス軍に蹂躪されたわが家には父親や兄弟たちの死体がころがっていただけ。そこで次にイネスが訪れたのはゴヤの家だが、この時すでに聴力を失っていたゴヤとイネスとの再会は……？ 次にイネスとゴヤが共に向かったのは、今はフランス軍の大臣として君臨しているロレンソのところ。そこでイネスがロレンソに訴えたのは、「あなたと私の娘は、今どこにいるの？」という思いがけないものだった。15年前、あの牢の中でロレンソとイネスとの間に一体何があったの？ そして、イネスが産んだという娘は、今どこで何を……？

## アリシアは何歳？

本来星5つのはずのこの映画を私が星4つとしたのは、映画の後半イネスの娘のアリシア役としてナタリー・ポートマンが登場するのはうれしいのだが、キャスト的にはどうしても不自然と思ったため。

だって、15年ぶりに異端審問所の牢の中から釈放されたイネスが牢の中で産んだ娘がいたとしたら、その娘は今何歳？ その娘役をナタリー・ポートマンが……？ そ

りゃ、若作りしているナタリー・ポートマンを観るのはうれしいが、それはどう考えてもミスキャスト。やはり年齢相当の女優を起用すべきでは……？ ミロス・フォアマン監督は、なぜナタリー・ポートマンの1人2役にこだわったのだろうか。

## 娘問題の処理方針は？

ロレンソは今、大臣としてやらなければならない仕事がたくさんあるから忙しい。そんな中、ゴヤが牢から出てきたイネスを連れてきたうえ、ややこしい過去の女性問題(?)を追及してきたからうとうしい限り……？

もっとも、スクリーン上で観ている限り、ロレンソの対応はそれなりに紳士の？そして、そこでのロレンソの対応策は、頭のおかしいイネス(?)は施設に入れるのが適当という判断だった。もっとも、「ひょっとして、あの時の、あの衝動的なセックスで子供が……」との不安(?)をぬぐえなかったロレンソは、今は死刑執行を待つばかりの身となっている異端審問所長を訪ね、「もし牢の中の女が子供を産んだらどうなるのか」と尋ね、さらに、その子供を引き取る施設まで調べに行ったから、きっとイネスの言っていることは本当だと確信したはず。他方、そんなイネスの娘アリシアについては、ゴヤも別のアプローチで接触に成功していた。大きなお世話ながら、ゴヤが独自の調査をしたのは、イネスの言っていることを頭がおかしくなったためと思えなかったから。アリシアと対面することができたゴヤがとろうとした行動は、アリシアとイネスを会わせることだったが、それってホントに意味のあること？それとも、ロレンソがやろうとしたように、アリシアにお金を与えてアメリカに行かせてやる方がアリシアのため？そこらあたりの価値判断は難しいところだが、売春婦として機嫌よく(?)働いているアリシアにしてみれば、いきなり2人のおじさんからワケのわからない申し出を受けて戸惑ったことだろう。

そんなこんなで、イネスの娘アリシアをめぐる大人たちの処理方針のくい違いが大きな問題点として浮上していたが、さてその一方で、天下国家の動きは……？

## ナポレオンの天下は何日？

「明智光秀の3日天下」は有名だが、ナポレオンの天下は何日？また、ナポレオンを倒したのは誰？それに正確に答えるためには1789年のフランス革命以降のヨーロッパ史をきちんと勉強しなければならない。しかし、ナポレオンを倒したのは、

トランプゲームの「ナポレオン」がナポレオン・副官 vs. 連合軍で争われることからわかるとおり (?), イギリスを中心とした反ナポレオン連合軍。

すると、今はマドリードでナポレオン軍の大臣として権勢の限りを尽くしているロレンソだが、その後盾がなくなると、ロレンソの失権も早いのでは……？

## 再び旧勢力が？ するとロレンソは？

ナポレオンのヨーロッパ征服によって新たなスペイン王となったジョセフ国王の逃げ足は速かった。イギリス軍がすぐ近くまで迫っていると聞かされたロレンソも、それを見習ってすぐにスペインを脱出しようとしたが……？ スペインにおけるナポレオンの天下が崩れた後のスペインの国政のあり方についてこの映画は詳しく解説していないので勉強が必要だが、再びあの旧宗教勢力が復活したのにはビックリ。旧宗教勢力にしてみれば、かつて聖職者であったロレンソが急に人権宣言にかぶれたうえ、ナポレオンの大臣として旧宗教勢力を弾圧したのはとんでもないこと。

したがって彼の行為は当然死罪に該当するはずだ。ところが、私の目に意外だったのは、ロレンソがその行為を悔い改め、再び神に尽くすと宣言すれば許すという寛大な処置をとったこと。さあ、そんな選択権を与えられたロレンソはどんな選択を？

## ゴヤの観察眼は？

ゴヤの目は今しっかりとロレンソに訪れた運命を見ていたが、その運命とは？ ロレンソがなぜあのような選択をしたのか、いやせざるをえなかったのかはじっくりと考えたいところ。他方、かわいそうだがイネスの頭が少しイカれていたことはやっぱりまちがいなさそう。だって、イネスは今あるところで拾った小さな赤ん坊を胸に抱き、わが娘としてロレンソに見せようと喜んでいたのでから……。そしてもう1人、ロレンソによって同僚のたくさんの売春婦たちと一緒にアメリカに送られようとしていたアリシアは今……？ スペインに侵攻してきたイギリス軍は赤い軍服が特徴だが、なぜか今アリシアはその1人の将校と一緒にマドリードに。さて、今や聴力は完全に失ったが、目だけはしっかりしているゴヤの観察眼は？ ゴヤの目はロレンソの運命だけではなく、イネスやアリシアの運命もしっかり見据えているはずだ。字幕が流れる中で紹介されるゴヤの絵を1枚1枚観ていると、なるほどこれがゴヤの歴史と人物をみる観察眼だったのか、とあらためて脱帽！

2008(平成20)年8月20日記